

正義

燕丹子云、太子丹質於秦、秦王遇之無礼、不得意、欲帰、秦王不聽、謬言曰、令烏頭白、馬生角、乃可、丹仰天歎焉、即為之烏頭白、馬生角、王不得已遣之、為機發橋欲陷、丹過之、為不發、風俗通云、燕太子丹天為雨粟、烏頭白、馬生角也。

〔史記〕刺客列伝卷二十六 注

この話は、「秦の人質となつていた燕の太子丹は、秦の王の扱いが非礼なことに不満を抱き、帰国を願つたが許されず、『烏の頭を白くし、馬に角をはやしたら帰国を許そう』と秦王から難題を吹きかけられた。丹が天を仰いで訴えると、不思議にも烏は頭が白くなり、馬は角をはやした。秦王はやむなく丹を出立させたが、途中からくりじかけの橋をこしらえ、丹を落とそうとした。が、丹が橋を渡つたとき、なぜかからくりは動かなくなつた。」といった内容である。この話は『藝文類聚』卷九十二「鳥部・烏」の項にも同様のものを載せる。

この三・四句の二つの故事は、題目の「春雪」の「白」から想起されたものであると同時に、「雪」という「自然」の風物を媒介に、この故事に込められている、蘇武・太子丹いずれもが帰還を許されたことを踏まえて、道真自身の望京の念の表出にもなっている作品である。

二二

一方、この『菅家後集』の作品群が制作年次順に配列されているであろうことは個々の作品を読み解く中でも明らかにすることが出来る。ここで、巻尾の「514 謫居春雪」の位置付けを改めて考察するために謫居時代の作品の流れを道真の詩風・心境の変遷を主眼に概観してみる。

前述したように太宰府謫居時代の作品は「476 自詠」から始まる。この詩は昌泰四年（九〇一）道真五十七歳の